

● 最優秀

さくら、ねこ、でんしゃ

のらいし れんぷう

6
5
24

剥き出しの波が砕け、六月の生温い潮風が頬を撫でていいる。明け方の白みがかった防波堤で僕は一人、整然と積み上げられたコンクリートの巨岩に佇んでいた。

「これ、なんていうんだっけ」

僕はさっきから自分を支えている「まきびし」にも似た幾何学的な構造体の名前を思い出せずにいた。足元では黒々とした磯波が渦を巻きざあざあど残響している。何だか体が重たい。

煙草、ライター、ペン、メモ帳、財布、携帯電話……。玄関先で唱える呪文は現役時代と変わらないはずだが、ポケットは空だ。今日は唱えずに出てきてしまったのか。それにしても僕はどうしてこんなところに？ いや、こんなところで何をしていたんだ？

波が爆ぜ、疑問はその姿を留めることができず水煙に掻き消された。そうして無為な思案を何巡か繰

り返してから、やっと僕は自分が何故か両手にそれぞれリモコンを握りしめていることに気がついた。見覚えのある形だ。

「これは、いららないなあ」

僕はリモコンたちを一本ずつ沖に向かって放り投げた。プラスチックの塊たちは綺麗な放物線を描き、音もなく波の合間に吸い込まれた。車でも通りかかったのだろうか、振り返ると金網に取り付けられた「釣り禁止」の反射板が赤く光った。

いつの間に、自宅の玄関で靴紐を解いていた。海水を吸った靴紐が指に張り付いてうまく解けない。すっかり組紐になってしまった左足を諦めてもう一方に取り掛かろうとしたとき、パタパタとスリッパの音がして、りん、と蛍光灯の明かりがついた。

「一晩中どこに行ってたの！ それに靴が砂だらけじゃない、どうしてひとこと言わないのよー」

悲鳴にも近い甲高い声が耳を劈く。ピンクのパジャマが目眩しい。だが確かに言われてみれば不思議なことに、どうやってここまで帰ってきたのかモザイクがかかったように思い出せない。

「……さんぽ」

「素敵なご趣味ですこと」

妻に何か説明しなければならぬ場面であることはわかるが、手持ちの札がないことにはカードの切りようがない。そう言えばさつきまで何か両手に持っていた気もするが、その記憶もすっかり滲んでしまった。

「あの、お代をいただきたいんですが……」

運転手がドアの隙間から首だけ出して、申し訳なさそうに眉毛をハの字にしている。

「あなた、タクシーに乗って帰ってきたの？」

妻は短く頷^{うなず}くだけの僕と愛想笑いを浮かべた運転手を交互に見比べた。

「すいません、この人どこから乗せてきたんですか？」

「埠頭^ふの方ですね。普段あの辺はまず走らないんですが、今日はたまたま」

「まあ、あんな遠くに。どおして」

妻の溜め息を背中に僕は靴のまま、ごん、ごん、と階段を刻んで二階に上がった。脚はまるで水中に浸かっているかのように鈍重だ。

「あれ、お金足りない？ あらら、そお」

いそいそと奥へ引っ込んでいく妻の横顔と「奥さん、大変ですね」という運転手の呟^{つぶや}きがこのときの最後の記憶だった。

*

いわゆるベッドタウンの小さな戸建てに、僕は妻と遅くにできた一人娘の美佳と暮らしている。

定年後の高揚にも似た解放感^{のせ}は日を追うごとに醒め、かわりに虚無感が顔を覗^{のぞ}かせるのにはほんの数

か月もあれば十分だった。タイムカードを押さない生活も、もう何年目になるだろう。今では雑踏の息吹すらどこか遠い異国の出来事とさほど変わらなないように思える。

刺激のない平坦な毎日だが、これまで払ってきた犠牲は決して少なくなかった。

大学を卒業して四十年以上、エンジニアとして生産の現場に携わってきた。深夜まで続く残業も無理なスケジュールの出張も当たり前になしてきた。当然、美佳の学校の行事に出席したことなど数えるほどもないし、進路の相談に乗った記憶もない。そうしていつしか、僕には何も期待しないことが我が家の暗黙の了解になった。

出世はそこそこした。客観的にみてサラリーマンとしては成功した部類だろう。仕事一筋といえどもこえはいいが、もはや家庭人でも社会人でもない今となっては「仕事以外のことは何もわからん」は何の免罪符にもならない。

「きちんと人生を楽しむ練習をしてこなかったツケよ」

この頃、いつも同じ台詞で僕をからかう妻は相変わらず元気に動き回っている。中学の教員を辞めてからは、主婦仲間との買い物にテニスにコーラスにフラワーアレンジメントに、最近はフランス語の会話サークルときた。「家にいる時間の方が短いんじゃないのか」と皮肉を言って返すのが僕の精一杯の虚勢だが、本当はこうして閉居しているせいでそう錯覚しているだけなのだろう。僕には知的好奇心や物事に対する関心そのものが喪失していた。

今日も午前五時前にベッドを出た。会社員としての習性の名残や梅雨入りの蒸し暑さだけではない、

最近は明らかに早い時間帯から覚醒する傾向が強い。尿意によらず深夜に目が覚める。それも何度も。食事の量もずいぶん減った。全てのものが砂を嚙んでいるように味気ないのだ。熱量を摂取し代謝すること、僕には身体がその役目を拒否しているように感じられた。何か取り返しのつかない病気にでもなってしまったのではないか。そんな心配までよぎる始末だ。

「あなた、最近、痩せたんじゃないか。そんな心配までよぎる始末だ。」

「気のせいだろう、そんなことはない」

ご馳走さま、と僕は箸を置いた。茶碗には朝食の残滓がまだ半分近く残っている。妻はそれを自分の茶碗に移してぺろりと平らげた。

不意に美佳の部屋から着信音が鳴った。

「ハイ……ハイ……すぐ行きます」

職場からの電話だ。顔は見えなくてもみるみる表情が曇ってゆくのがわかる。始発で出ていき終電で帰ってくる生活、らしい。

美佳と僕が遭遇することは、ほぼない。同じ空間を共有してはいるがすれ違いもいいところで、実際、声を聞くのも一週間振りだ。僕は手早く身支度を整えた美佳と廊下ですれ違った。

「お父さん、私、行ってくるから」

最低限の化粧にボサボサの頭。どうせ電車の中で辻褃合わせをするつもりだろう。

「いいなあ、美佳は行くところがあって」

逆光の中でパンプスを履く背中の中の動きが一瞬、止まった。

「しまった」と思った時にはもう遅い。靴べらが唸りをあげて顔を掠める。

「うるさい！ いい加減にしてよ毎日毎日抜け殻みたいに。イライラするからもうそういうこと言わないで。本当に」

まさに嘔みつく、というのがびったりの顔面で美佳は僕に罵声を浴びせ続けている。こんなときなんて言えはいんだっけ。言葉が浮かんでこない。

ざあああああああああざあああああざああ。

にわかに、潮騒にも似たノイズが僕を支配し、意識が遠くへ攫われる心地がした。

「日曜だつてのに、ふざけんな」

まだ口紅も塗っていない唇から愚痴が漏れた。そうか、今日は日曜日なのか。

「パッパッ」

俯いてもぐもぐとしていると、それまで散々に鬱憤を発散させていた美佳が怪訝な顔で覗きこんできた。

それはそうだろう、僕は元々、気の長い方ではない。普段なら即座に怒鳴り返しているか平手打ちを食らわせているところだ。本人もそんなことは百も承知でやっている。要はまだ、甘えているのだ。

水槽のモーター音だけが二人を場に繋ぎ止めている。紅白の琉金が水面で何かパクパクと叫び始め、美佳が口を開いた。

「もう行くね」

そう告げる顔は、昔の僕に少し似ていた。

その晩から僕はほとんど眠ることができなくなった。

全てが億劫おっくうになり、次第に日常生活に齟齬そごを来たようになった。

以前はすんなり出てきた物の名前が出てこない。置いたはずの物が本来あるはずのない場所に置いてある。頼まれていた用件を忘れてしまう、といった具合だ。物忘れの頻度と程度が酷ひどくなったと言えればいいのか。些細ささいな内容で妻と言った言わないの諍いさかいになることも頻繁になった。

例を挙げればキリがないが、こんなことがあった。

ある日、夕食の時間に妻の姿がない。ずいぶん待ったが結局、我慢しきれずに美佳のカップ麺をたぐっていると、やっと深夜になって妻が帰ってきた。若い男と一緒に。

「君は？」

「あ、自分は川島と申します。中学の時にお世話になっていました」

「……」

「差し出がましいようですが先生をご自宅までお送りさせていただきました。ちょっと心配だったので、ハイ」

今日は幹事だったので、と大柄な青年は首筋に滴る汗をハンカチで拭きながら付け加えた。

「私、言ったわよねえ、今日は教え子たちの同窓会にお呼ばれしているから夕飯は自分でお願いします」

ねって」

「そんなこと聞いてないぞ」

「何回も言ったわよ私、カレンダーにもちゃんと書いたし」

非礼を詫^わび、お茶の一杯でもというのを丁寧^{ていねい}に断^{ことわ}って元教え子は帰^{かえ}って行^いった。例えばこんな具合だ。

街灯に明^あかりが宿^{とど}る時間帯、こうしてベランダで一服しながら過去の記憶^{きおく}を反芻^{さつじゆ}しているがやはり思い当^{あた}る節はない。正直、不安^{ふあん}で仕方がない。認^まめたくない。認^まめてたまるか、そんなこと。絶対に。

もう一吸いと震^{ふる}えるフィルターを顔^{かほ}にや^やったとき、唇^{くちびる}が肩^{かた}すかしをくらった。

「熱ッ」

化繊^{けせん}の靴下^{くつさ}が溶^とけて瓢箪^{ひょうたん}形の歪^{ひび}な穴^{あな}が開^{ひら}いている。すぐ脇^{わき}にはまだ小さな焰^{ほのお}を携^{たづ}えた吸^すい殻^{がら}が羽虫^{はむちゅう}の死骸^{しかい}と一緒に転^{ころ}がっている。

「あなた、変よ。変。へん^{へん}したら、変」

弾^はむような調子^{てうし}をつけて妻^{つま}がガラス越^こしに歌^{うた}った。

「脳のトレーニングが足りないからボケるのよ」

ボケ、という単語^{たんご}に反^{はん}応^{おう}して後頭部^{こうとうぶ}が熱^{あつ}を帯^たびた。喉仏^{のどぼね}のあたりが引^ひきつ^つてくる。

「なんだッ、そんな人をボケ老人^{らうじん}呼^よばわりして。ぼ、僕は、そんなんじゃない！」

「なによ急に、怒鳴^{いか}っちゃって。あのね、それが自分でわかんないからボケてるって言^いってんのよ。

あっちこっちに物を置き散らかして！ 認めなさいよこのボケ老人」
違う。でも、もしかしたら。言い切る自信がないのが悔しい。

今は妻でさえ正面から向かい合うのが怖い。半分背を向けながらポケットをまさぐる。嫌だ嫌だ。落ち着いて少し冷静になるう。箱を振ってみたが煙草は残っていない。どこへいった。さっきは確かに……。僕は舌打ちをして箱を握り潰した。視界の端で小さな昆虫が袖の辺りから這い上がって来る。駄目だ。これ以上、現実を直面させられたら正気でない自信がない。目を瞑って深呼吸する。

「ビールを飲んで寝てしまおう」

僕は取り敢えずそうして現実から逃避することにした。いつもの場所に美佳のビールがあるはずだ。僕はべたべたと付箋紙が張り付けられた冷蔵庫に足早に近寄ると、屈んで野菜室を開けた。茄子や大根がパズルのように隙間なく埋め込まれている。

その中に奇妙なピースがあった。

野菜に挟まれてテレビとエアコンのリモコンが一つずつ、まるで「拍子木」のごとく揃って垂直に野菜室の中央に挿入されていたのだ。周りの均衡が崩れないよう、そろそろと抜き取って触れてみる。なるほど、よく冷えている。

僕はボケ老人なんだ。

暫くして僕はリモコンを手静かに立ち上がった。

*

自宅の二階で僕は電池が切れたように靴のまま仰向けに寝転んでいた。酷い筋肉痛だ。全身が海水臭い。

美佳がしゃがみこんでこちらを見下ろしている。

「仕事はいいのか」

まっすぐな瞳は質問を優しく制した。

「パパ、病院に行こう」

翌日、病院を出た時にはもう昼過ぎだった。陽差しが容赦なく皮膚に突き刺さる。僕たちはバス停から離れて日陰で涼むことにした。

「ひじ、いつまで押さえてるのよ」

採血の跡をいつまでも親指で押さえているのを妻が指さした。血液検査は異常なし。尿酸が少し高いだけだ。次のバスが来るまでに少し時間がある。僕は薬局で貰った処方もちの説明書きを読み返してみた。耳慣れない響きの薬剤名の横にそれぞれ効能が記載されている。

「脳内のセロトニン濃度を高め、抗うつ作用などの作用を示します。通常、うつ病、うつ状態、パニック障害、外傷後ストレス障害の治療に用いられます」

「視床下部や大脳辺縁系を抑制し、催眠、鎮静、抗不安などの中枢神経作用を示します。通常、不眠症の治療、麻酔前投薬に用いられます」

もう一枚の主治医のメモにはこうある。

- ・五十嵐さんは抑うつ状態です
- ・うつ病の可能性ががあります
- ・初期認知症の可能性ががあります
- ・次の受診のときには娘さんも一緒に来てください

最後の項目だけ数センチ他の項目と離され赤ペンで波形のアンダーラインが引いてある。

「認知症」の三文字だけが浮かんで次第に文字がぼやけて形を成さなくなった。情けなくて、涙が出た。その晩、僕は夢を見た。

薄暗くて、冷たい。海底にはあの巨大なコンクリートの塊が崩れたジェンガのように積まれ、黒々とした藻がその表面を包むように覆い隠している。頭上にはそう遠くない距離に海面が青白く揺れ、いくつもの光芒が尾を引いて辺りを斑に照らしている。僕の身体はゆっくりと浮上しはじめ、周囲が光彩を帯びてゆく。指先で藻の柔らかな手触りを確かめながら、僕は世界が光に満ちるのを感じた。

朝の光が眩しい。一晚、起きずに寝床に就いていたようだ。隣のベッドでは妻が丸くなって鼾を立てている。

そうだ、「テトラポッド」だ。

どうしてこれがわからなかったんだろう。僕は降って湧いた単語に思わず弛緩しかんした微笑ほまみさえ浮かべてしまった。

そして、そろりと寢室のドアを開けたとき、僕は思わずあっと声をあげ、その薄ら笑いを左手で押さえた。

——そうか、僕はあのととき死のうとしていたのか。

次の受診からは美佳も半休を貰って付き添ってくれた。家族向けの説明は煩雑で少し長くなるからと待合室に出された僕はベンチに腰かけながら掲示板を眺めていた。「禁煙 当院は敷地内を含め全面禁煙となりました。ご協力ご理解をお願いします」「みんなで予防！ 感染症週間」「高齢者福祉・介護の相談窓口一覧」毎度のごとく診察室ではまだ美佳と妻が先生の話を聞いている。

また、薬が増えた。

それから先はあっけなかった。まず夜間に何度も目覚めることがなくなった。食欲も戻り、以前よりもむしろ少し太ってきたようにも感じる。日常の何気ない匂いや手触り、色彩、埋もれていた五感が確かな実感を伴って得られはじめ、自分がここまで多彩な情報に囲まれて生活していたことに驚くばかりだ。

ただ、味覚だけが妙におかしい。まだ僕が本調子でないだけか、それとも薬の副作用だろうか。まあそのうちどうにかなるだろうと精神衛生を優先して気にしないことに決めた。

四回目の外来。診察室の窓に入道雲が映えている。

「やぐら、ねこ、でんしゃ……この二つの単語を復唱してください。……はい結構です。記憶のテストなのででもう一度聞きます。覚えていてください。次は数字の問題に移りますよ」

桜、猫、電車。どこか長閑な風景を彷彿とさせる組み合わせだ。

今回は簡単な認知機能の検査をした。結果は満点。初診のとき半分くらいしか出来てなかったの覚えてますか、という先生の質問に苦笑いで答える。正直、ほとんど覚えていない。

端的に言うとなんの診断は「うつ病」とのこと。そして、僕のように認知症以外の病気で認知症に似た状態になることを「仮性認知症」と呼ぶのだそうだ。再発予防のために薬は忘れずに飲み続けて下さいと注意を受けた。

「あの、神経伝達物質、でしたっけ。人間の感情がこんなものでいったら失礼ですけど、ここまで変化するものなんでしょうか？」

「そんなもんですよ、脳みそだって臓器なんですから」

「はあ」

なにか哲学的な問答を勝手に期待していたのだが、意外とあっさりした返事に拍子抜けした。こんな錠剤で精神状態が大きく変化するという事実は何だか自分というものが少し信じられなくなった。

帰宅後、次の外来の予約日を書き込もうとカレンダーを捲りながら、僕は初診からの二か月間を振り

返っていた。こうしてだんだんと頭の霧が晴れて感覚が取り戻されてくると、僕は日常生活の小さな異変に違和感を覚えるようになっていた。

先週、履いている靴下の甲に穴が開いているのを見つけた。

だからどうってことはない、ただの穴だ。でもこれは確か以前にペランダで煙草を落としたときのものだ。捨てておいてくれと妻に頼んだはずだが、いつもの引き出しにストックされていたので、入浴の直前まで気づかず丸一日履いて過ごしてしまったのだ。

ほとんど何も書かれていない真っ白なカレンダーをバラバラと指で弾く。妻と違いどうせ僕の予定など定期受診くらいしかないのだが。

何も書かれてない？

あの青年が妻を送ってくれた日付のあたりを探してみる。同窓会を示す記載もそれらしい印も付いていない。テニスもコーラスもフラワーアレンジメントもフランス語も。何か月遡ってみても何も書いてない。胸騒ぎがした。

そうして不協和音を抱えたまま数日が過ぎた頃、珍しく留守番電話に記録があった。

「地域包括支援センター相談員の山本です、五十嵐美佳様の携帯電話にお掛けしたのですが繋がらなかったのをごちらに掛けさせていただきます。折り返しお電話お願いします。失礼します」

地域包括支援センター。聞き覚えがある。確か待合室で見かけた介護保険がどうたら機関だったはずだ。僕は美佳の帰宅を待つて話を聞くことにした。

「おい、留守電に入ってたぞ、地域包括なんとかつて。まさか僕の介護のことを言ってるんじゃないだろうな。やっぱり、うつ病なんかじゃなかったのか？ ええ」

「落ち着いてよ、違うわよ、違うの」

「何が違うんだ」

「もうわかっているかもしれないけど、ママね、たぶん認知症なの」

美佳は妻のことを行政の窓口で相談していたのだ。利用できる可能性がある制度を確認したかったのだが、結局、正式な診断がついて治療に繋がらないことには何も始まらないのだという。

「じゃあなぜそんな状態で認知症だって言えるんだ」

「去年ぐらいいから少しずつ変だったのよ。最近は料理の味付けだって目茶苦茶だったじゃない。サークルにも全然参加しないで日中どこに行ってるのかわからないし」

僕は天井を仰いで、それから無意識にカレンダーに目をやった。

「それでパパの受診の時に毎回先生に相談してるの」

「うん……」

僕の診察のあと、先生は妻にあれこれと質問していたが、ほとんどまともに答えられなかったらしい。妻は毎度、にこにここと愛想笑いをして誤魔化すか「どうだったのかしらねえ」と美佳に話を振って場を凌ぐ始末だったのだという。

「ちゃんと検査した訳じゃないけど、恐らく間違いないだろうって。先生は正式な受診を勧めてくれて

るんだけど、ママ本人は、私は病気じゃないし調べられるのも嫌だって」

知らなかった。元は教師をやっていたくらいだし、人の意見を柳に受けるといったタイプではないとは思っていたが、妻にもそれなりのプライドがあったことも意外だった。僕がボケてやってしまったと思ひ込んでいた幾つかも妻によるものだったのだろう。実に簡単なことだ。

どうして家族の異変にもっと早く気がつかなかったのか。僕がもっとしっかりしていれば。今更、悔やんでも仕方がない。

「でも、今のパパなら伝えてもいいってお話は先生からあったし、いずれはちゃんと話をするつもりだったのは本当。それは信じて」

「わかってる」

結局、僕はまだ蚊帳の外だ。けど、逆に言えば僕なんか居なくても世界はそれなりに回っているのだ。そう考えると少し気が楽になると同時に、急に美佳がたくま遅く思えてきた。

「私のもっと早く気がつけばよかったんだけどね」

無理もない。月に数回は職場で寝泊まりしているのだ。そんな余裕はない。僕は首を横に振った。

「あー、あとついでに私、仕事、辞めちゃうかも」

「うん、大丈夫だ。パパがいる」

「何、それ」

美佳が八重歯を見せて笑った。

「それで、一つ私から提案なんだ。これからはパパがママを先生のところへ連れて行って欲しいの。それなら診察を受けると思うから」

「馬鹿な、そんな騙すようなことができるか」

「はじめは本人が目的をわかってなくても、何となく、でいいのよ」
「でもそんな」

不承不承応じたが、実際この作戦はうまくいった。はじめは自分の問診で困惑を露わにする場面もあったが、慣れてきたのか、そのうち自分からいつもの調子でべらべらと話すようになったのだ。なんだか変な感じになっちゃったなあ。とぼやいても仕方ない。

結局、それから僕が受診に付き添うことになった。いや、この場合は連れ立ってと言った方が正しいか。

さくら、ねこ、でんしゃ。

僕の七回目の受診のとき、妻の診断が確定した。

アルツハイマー型認知症。認知症の半分はこのタイプだそうだ。

妻の発症は早い部類だそうだが、ある程度の年齢であれば誰がなってもおかしくないし、外来に付き添いで来たはずの夫婦のもう一方が認知症だったなんて話はさほど珍しくはないと説明を受けた。

本人は病名を聞いてもどこ吹く風といった体だ。僕の初診のとき、妻が問診票に住所を書けずにいるので、すぐに看護師が先生に耳打ちしたのだともこのとき聞かされた。

毎度、妻の通院には必ず同伴した。

先生曰く、処方しているのは認知症の薬ではなく、あくまでボケ防止の薬、だそうだ。考えてみれば変な話だが妻の中ではそれで整合性がとれて治療ができていいるのだから不思議なものだ。この頃は不完全ながら妻は自身が認知症である自覚も出来ているようだが、はつきりさせていない。こういうのは何となく、でいいのだ。

「場に慣れたらそこから先は案外すんなりいくものです。旦那さんのお力ですよ」と先生は言った。夏が終わろうとしている。

今後は火と自動車の扱いは厳禁ですから、との主治医の指示に従い、僕は妻に代わって炊事を担当することになった。ひまわり柄のエプロンが似合っているとは言い難いが、これはこれで新鮮だ。

朝起きて、朝食を作り、洗い物をして、昼の献立を考えて。淡々としたものではあるが不思議と心が落ち着くのは、これまで僕が背を向けてきた妻の世界を再体験しているからなのだと勝手に解釈することにした。悲しいのは僕の病状が治癒するにつれ、妻の挙動のアラが目立つようになったことだ。やはりそれなりに進行していたのだと今の僕ならわかる。わかってやれる。

年単位で症状は進む。僕のことと美佳のことと曖昧になる日がきつと来る。でも、まだまだ家の中の

ことは妻が先生だ。先生は厳しい。今日も食器を洗う時の手順がなつてないと怒られてしまった。「誰のせいでもこんなことになってるんだ」

慌てて取り繕おうとしたが、その必要がないことはすぐにわかった。

妻の「いいのよ、あなた病気なんだから」と言わんばかりの表情から察するに、どうやら最近の妻は僕のことをいまだに認知症だと思っている節があるようだ。菌痒がゆいところだが、やはり、それでうまくいっているのであればわざわざ訂正する理由もない。つまり、これでいいのだ。

「C'est en forgeant qu, on devient forgeron」

「えー」

「フランスの諺ことわざ。習うより慣れる、よ」

隣で鍋をすすいでいる美佳がふっと吹きだした。つられて僕も口角をくいと上げてみる。

だが、こうして穏やかな生活に身を置いていても、時折、まだあの潮騒しゅんじゅんの音がどこからかさざめき、そんなとき僕はいつも美佳と同じことを聞こうか聞くまいか逡巡しゆんじゆんするのだ。

「なあ、二人ともボケてたら、お前どうするつもりだった？」

結局、僕はまだ怖くて聞けていない。

◆受賞者の横顔◆



のらいし
れんふう

本名、年齢、非公開。

覆面作家としての活動を目指しているため、プロフィール詳細は非公開。
趣味は野良猫と見つめ合うこと&ラム酒を飲むこと。

◎

高齢社会を最も身近に感じる存在は何かを考え、認知症を題材としました。作中では端的な表現に留めましたが、介護とキャリアの両立は子世代にとって深刻な課題であり、そこに大きな葛藤があったことは言うまでもありません。美佳は何を優先し、何を犠牲にしたのでしょうか。敢えて親側の視点から間接的に描くことでそれが浮き彫りになるよう表現したつもりです。30周年という節目の年に荣誉ある賞をいただき大変嬉しく存じます。